平成三十一年度　国語　新入生テスト

一　次の文章を読んで後の設問に答えなさい。

Ⅰ

表現とはイメージを伝えることです。しかし音声言語ではそれがaイガイに難しい。日本語を読むだけという「安易さ」のなかで、肝腎のイメージがおろそかになってしまうからです。

「目の前にあるイメージの絵をつくって朗読しているのですが、うまくいきません」

俳優bヨウセイ所の生徒たちが訴えます。イメージが大切ということはどんな指導者にもわかっているのでしょう。だから「目の前に絵をつくれ」と教えるのだと思います。それなのに、なぜうまくいかないのでしょうか。

Ⅱ

声楽家の楠瀬一途さんの稽古につきあったことがあります。楠瀬さんは「砂山」からはじめました。山田耕筰が作曲したほうの「砂山」です。

海は荒海　向こうは佐渡よ
すずめなけなけ　もう日は暮れた
のびやかに広がる美しい声、しみじみと沁みてくる情緒、①どこといって文句のつけようはないのですが、でも、なにかものたりません。

「景色が見えてるかな」

「見えてる……と思うよ」

彼はイメージした絵を説明してくれました。イメージを絵にすることはできていたのです。

「足に何を履いているの？」

「え？」

私のとっさの質問に、彼は答えられませんでした。

「クスさんは、景色として、砂山と海を見ているだけでしょ。あなたが実際に砂山にいなくちゃ。何を履いているかな。ゴム草履じゃないよね。時代がちがうもの。わら草履かな。指の間に砂粒がはさまっているかもしれない。日が暮れて、砂地はだんだん冷えてきてるんじゃないだろうか。空気はどうかな。冷たい潮風だろうな」

彼は、私のいうことを忠実にやってみようとしました。前後左右上下、自分のまわり全体にイメージの世界をつくろうとしました。突然、靴も靴下も脱ぎました。冷たさを実感しようとしたのです。しばらく新しいイメージに集中したあと、うたいはじめました。さっきとは、声そのものがちがっていました。②足の裏に冷たさを感じるという、ただそれだけで、声まで変わってしまったのです。

Ⅲ

彼はコンサートでうたう歌をすべて稽古しなおしました。イメージを「目の前の絵」から「いまいる空間」に変えたのです。そして五感を総動員して現実感を得ようとしました。

「江戸の子守歌は赤ん坊をおんぶしているけれど、『中国地方の子守歌』では目の前に赤ん坊が見えていなくちゃいけない。抱いてあるか、寝かしてあるか」

ねんねこしゃっしゃりませ　寝た子の可愛さ
起きて泣く子の　ねんころろん　つら憎さ
ねんころろん　ねんころろん

赤ん坊の乳臭さを思い出すことで現実感をつかみ、さらに、赤ん坊を驚かさないように気を遣ってもらいました。

それまで多くの声楽家のこの歌を聴いてきましたが、うたい出しが気に入りませんでした。強すぎるのです。稽古のはじめ、楠瀬さんも強すぎました。

「赤ん坊がひきつけを起こさないようにはじめてもらえないかな」

山田耕筰はちゃんと「子守歌だよ」と言っています。うたい出しはメゾフォルテですが、この歌ではメゾフォルテがいちばん強く、あとはピアノからピアニッシモまでで、全体にひじょうに音が弱くなっています。でもやはり演奏家は指定された記号にこだわり、記号どおりに表現しようと思うようです。

「そのメゾフォルテ、音の強さじゃなく、気持ちの強さって解釈したらどうかな」

「ええっ！　そんなことはじめて聞いたよ」

楠瀬さんはおもしろがってやってくれました。長野県伊那市のリサイタルで楠瀬さんはこの歌をうたいました。録音が残っていますが、③うたい出しはピアニッシモです。

リサイタル後の合評会で、その地の音楽関係者がみな「中国地方の子守歌」のうたい出しを問題にしたそうです。みんな記号にしばられていたのでしょう。

「赤ん坊をびっくりさせたくなかっただけですって言ってやったよ。みんなびっくりしてたなあ」

ほんとに感心したのですが、すでに評価を受けている声楽家にはめずらしい素直さでした。

楠瀬さんの声が変わったのはなぜでしょうか。

Ⅳ

野口体操で有名な東京芸術大学名誉教授だった野口三千三さんによると、④人間の体は水の入った革袋。骨はその中に浮かんでいる棒なのだそうです。

水は一点の変化を全体に伝えます。楠瀬さんの足の裏の細胞の変化は声帯にまで伝わっていったのです。

イメージを絵ではなく、立体、環境としてとらえ、そのなかに自分を置きます。そして、五感を総動員します。どんな匂いがしているのか？　寒いのか？　暑いのか？　湿度は？　風はあるか？　どんな音が聞こえている？　何に触れているの？　何を持っている？　重い？　軽い？　そして私は、いったいだれなのか？　作者？　登場人物？　何を着ている？

イメージを「絵」としてとらえることは、黙読でもできます。でも、それは観念的な操作、頭だけのイメージです。

イメージを立体、環境としてとらえ、そのなかに自分を置いて、五感の記憶や情緒の記憶を総動員する。そしてcカクウの

世界を現実化する。このときはじめて体がイメージをもったといえるのです。そしてこのイメージこそ、朗読に必要なほんとうのイメージです。こうしたイメージを、私は、「細胞でとらえたイメージ」と呼んでいます。「あなた、景色が見えますか」ではなく、「あなた、そこにいますか」なのです。そして、「そこにいる」ことを実感するには、体が感じていなければなりません。イメージの世界の、温度を、湿度を、匂いを、五感で実感していなければ、イメージしているとはいえないのです。そうした強いイメージは、「あなた、あの人のことがわかりますか」ではなく、「あなた、あの人になれますか」といったことにつながっていきます。⑤理解や同情を超えて、共感・共存につながってくるのです。

（永井一郎『朗読のススメ』より）

問一　波線部a～cのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　傍線部①「どことといって文句のつけようはないのですが、でも、なにかものたりません。」について、楠瀬さんの歌のどのような点がよくて、どのような点に問題があったのか、Ⅱの部分の傍線①より後ろにある表現を使って、五十字以内で説明しなさい。

問三　傍線部②「足の裏に冷たさを感じるという、ただそれだけで、声まで変わってしまったのです」とあるが、なぜそうなったのか、本文中からその答えとなっている一文をさがし、はじめの八文字を抜き出して答えなさい。

問四　傍線部③「うたいだしはピアニッシモです」とあるが、「メゾフォルテ（やや強く）」を「ピアニッシモ（極めて弱く）」で歌う時に、「楠瀬さん」はどのような工夫をしたと考えられるか、文章の内容を踏まえて四十五字以内で説明しなさい。

問五　傍線部④「人間の体は水の入った革袋」という比喩を、筆者はこの文章でどのような意味で使っているか、最も適当なものを次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

ア　人間の体は、観念を働かせる頭を支える上で、骨より大切な働きをするものである。
イ　人間の体は、微妙なバランスの上に成り立っている、繊細でもろいものである。
ウ　人間の体は、外部からの影響を受けやすく、状況に支配されやすいものである。
エ　人間の体は、一つのイメージを体全体で共鳴させながら感じ取っているものである。

問六　傍線部⑤「理解や同情を超えて、共感・共存につながってくる」とあるが、Ⅰ「理解や同情」、Ⅱ「共感・共存」の説明として適当なものを、それぞれ次の中から選んで記号で答えなさい。

ア　その人の立場や視点から世界をとらえようとすることで得られるもの。
イ　社会全体のあり方について、共に社会に訴えていくことで得られるもの。
ウ　適切に距離を保ちながら、相手のことを考えてやることで得られるもの。
エ　その人の姿を思いながら、その人についての話を聞くことで得られるもの。

問七　この文章の考えに沿って、高浜虚子の俳句「春風や闘志いだきて丘に立つ」を声に出して表現するとき、どのようなことが大切になるか、句の内容を踏まえながら「～表現すること。」という形で、二点挙げて説明しなさい。

問七について初めの作問例

○　この文章の考えに沿って、高浜虚子の俳句「春風や闘志いだきて丘に立つ」の鑑賞文を書くとすれば、どのようなことが大切になるか、句の内容を踏まえながら「～表現すること。」という形で、2点挙げて説明しなさい。

答え

～・実際に春風に触れながら丘に立っているようなイメージを表現すること。
・自分自身が闘志を抱いているようなイメージを表現すること。　↴「朗読する時」でもよい

○　この文章を読んだ上で、漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の鑑賞文を書く時、はじめの2行で、(1)風景、(2)人物について、どのようなことに注意しながら書くことが大切になるか、詩に描かれた内容を踏まえて、それぞれ説明しなさい。

故人西辞黄鶴楼　　※東書・光村ともに中学教科書に掲載
煙花三月下揚州
孤帆遠影碧空尽
但見長江天際流　　※訓点を付けます

答え

～・黄鶴楼を後にする友を見送っているのが自分であることをイメージしながら書くこと。
・春がすみのかかる三月の風景の中に自分たちが実際にいることをイメージしながら書くこと。

△　この文章の筆者は約四十五年間、テレビ番組「サザエさん」で、サザエさんの父親「磯野波平」の声をつとめた人物である。画像・台本を見ながら音声を収録する際に、筆者が大事にしてきたことはどのようなことであったと考えられるか、2点挙げて説明しなさい。

一

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
a					I	
					II	
b						
c						

一

問一　a　意外　b　養成　c　架空（1点×3）

問二　歌詞のイメージを絵にすることはできていたが、自分の周り全体にイメージの世界をつくっていなかったこと。（6点）
歌詞のイメージを絵にすることはできていたが、2点
自分の周り全体にイメージの世界をつくっていなかったこと。　3点

問三　楠瀬さんの足の裏（3点）

問四　目の前にいる赤ん坊をイメージし、驚かさないように、気持ちを強く込めて歌う、という工夫。（7点）
目の前にいる　1点
赤ん坊を　1点
イメージし、　2点
驚かさないように、　1点
気持ちを強く込めて歌う、という工夫。　2点

問五　エ　（4点）

問六　I　ウ　II　ア　（3点×2）

問七　・実際に　春風に触れながら丘に立っているようなイメージを表現すること。
「実際に春風に触れているようなイメージを表現すること」　のときは　2点
「実際に丘に立っているようなイメージを表現すること」
・自分自身が　闘志を抱いているようなイメージを表現すること。　（3点×2）
※　二重傍線部がなければ×

一

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
a 意外	歌詞のイメージを絵にすることはできていたが、自分の周り全体にイメージの世界をつくっていなかったこと。	楠瀬さんの足の裏	目の前にいる赤ん坊をイメージし、驚かさないように、気持ちを強く込めて歌う、という工夫。	エ	ウ	実際に、春風に触れながら丘に立っているようなイメージを表現すること。
b 養成					ア	
c 架空						自分自身が、闘志を抱いているようなイメージを表現すること。

令和元年度　1学期期末テスト　1年普通科・フロンティア科　国語総合・前半　R1・6・24(月)1限目

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

1　私の専門である分子生物学は、生物を分子レベルまで a カイセキし、遺伝子のしくみなどを研究して医療や農業などに生かそうというものです。最先端科学の世界に身を置いている私ですが、科学万能という考えに b ヘンチョウする現代にこそ、『パンセ』に書かれた思想や世界観が再評価されるべきだと考えています。

2　パスカルが生きた十七世紀のフランスには、もう一人有名な哲学者がいました。「近代哲学の父」と呼ばれるルネ・デカルトです。パスカルと同じく哲学者であり数学者でもあるデカルトは、パスカルより二十七歳年上で、代表作は『方法序説』。「我思う、ゆえに我あり」という言葉がよく知られています。

3　パスカルは、すべての面においてこのデカルトと c タイショウ的な存在でした。たとえば、デカルトが「人間の理性は万能である」と言ったのに対して、パスカルは「限界がある」と言っています。世の中のことについて、デカルトは「すべてに原因と結果がある」と言い、パスカルは「時には B を信じる」という考え方でした。

4　パスカルとデカルト、十七世紀に登場した二人の天才哲学者の思想の上に近代社会が成立し、さらにその上に私たちは現代社会を築いてきました。大きく言えば、私たちはデカルトの考え方を採用して、パスカルの考え方を捨ててきたのだと言えます。

5　デカルトの主張は、「①**この世界はすべて因果関係で成り立っており、メカニズムとして理解できる**」というものでした。メカニズムを追究して因果関係さえ解き明かせば、生物だろうがこの世界全体だろうが、必ずすべてを理解できる。私たち生命体についても、精密な機械と同じように完全に解明し、制御できると考えていたのです。

6　一方、パスカルは「合理的に因果関係を突き d ツめるだけでは、必ずしもすべてがわかるとは限らない」と考えていました。つまり、科学の限界を理解しており、世界というものに対する**②謙虚さとある種の諦観を持っていたのです。**

7　現代の科学者は、デカルト的な考え方のもと、合理的に物事を追究しています。分子生物学の世界で言えば、私も含めた世界中の研究者が、日夜遺伝子操作の実験を繰り返し、生命の謎の解明に e イドんでいます。科学者の視点で見ると、生命体はミクロの分子が精密に組み合わされた物体にすぎません。これはデカルト的な見方と言えます。単なる物質の集合体であるならば、機械と同じように、パーツを操作することで作り変えたり制御したりすることも可能なはずです。

8　しかし、現実には遺伝子操作の研究は目論見どおりには進まず、生命の謎はいまだすべて解明されていません。それどころか、実験しても理屈どおりに結果が出ないことが多く、謎は深まるばかりです。これらの結果を受け、一部の科学者は気づき始めています。実際の生命体は、そしてこの世界というものは、ものすごく複雑かつダイナミックで、**③デカルト的機械論だけでは解決しないことばかりだ、**と。

9　たとえば人間の体が作られるとき、まず受精卵が細胞分裂し、その細胞がどんどん分裂を繰り返して脳や心臓、皮膚など体中の細胞が作られます。そのプロセスは、コンピュータのように全部最初からプログラム化されているというのが通説です。しかし一方で、それでは説明がつかないという意見があります。遺伝子に欠損を与えたマウスを育てる実験では、成長後に欠損の影響が全く表れないケースが多々あります。これは、細胞が場合に応じて相互に空気を読み合い、**口機口変**に補い合っているのだと見るのが自然です。機械論的には理解不能な現象なのですが、生命体の中にはそのように可変的で動的な作用、ダイナミックなシステムがあるのだと考えられるのです。

10　この例一つとっても「世界のすべては機械的メカニズムとして解明できる」という考えが現実に則していないことがわかります。

11　私たちの体は、細胞レベル、あるいは細胞より小さい分子のレベルでは、ものすごい速度で合成と分解を繰り返しています。消化管の細胞などは二、三日で交換されますし、思考をつかさどる脳ですら、細胞の中身は入れ替わります。一年もたてば、人間は物質レベルでは完全に入れ替わってしまうのです。

12　私たちは、自分のことをいつも同じ「自分」だと思っています。しかし、私たちがずっと同じだと思い込んでいる「自分」は、実は日々更新しているわけです。現代社会では、自己同一性や一貫性というものが重視され、自分の考えを貫き通すことが美徳とされますから、一貫性のないことを言うと「この前言っていたことと違うじゃないか」と怒られてしまいます。しかし、実際の「私」は絶え間なく変化しているのですから、記憶だって塗り替えられているかもしれません。「今日の私」は「明日の私」とは違い、「昨日の私」とも違うのです。そう考えると、**④自己同一性や一貫性などというものは幻想でしかないと言えます。**

13　さて、現代社会の中心に据えられてきたデカルト的思考が、それだけでは万全でないことがわかっていただけたでしょうか。もちろん、機械論的合理性によって解明できることも多々あるのですが、「機械論的合理的に突きつめればなんでも理解でき制御できる」という考え方には、自然や生命に対する謙虚さが欠けているように思います。

14　思えば、私たちは常に「何かを完成させる」ことにとらわれています。学校では「締め切りまでにレポートを提出しなければならない」、職場では「納期までに製品を作らなくてはいけない」というように、いつも「完成させる」ことへのアプローチに汲々としてきたのです。「完成させる」ことを目的とするのは、「世界は完全に解明できる」とするデカルトの考え方に通じます。一方、**⑤パスカルの考え方は違います。**それは、『パンセ』の中で最も有名な一節にも表れています。

「人間は一本の葦にすぎない。自然の中でも最も弱いものの一つである。しかし、それは考える葦なのだ。（中略）だから、わたしたちの f ソンゲンは、すべてこれ、考えることの中に存する。わたしたちはその考えるというところから立ち上がらなければならない。」（断章三四七）

15　葦はいつも風に吹かれて g ユらいでいます。同じように、私たちも絶え間なくゆらぐ弱い存在です。そんな私たちがどれほど考えても、この世界、この宇宙のすべてを知り尽くすことはできません。世界というジグソーパズルのピースはどんどん更新されているので、どれほどピースを集めても完成することはないのです。

16　それでも、考え続けなくてはいけない。いろいろな人の手によって世界が書き換えられ塗り替えられていく、そのプロセスの一部に参加することに意味があるのだ――パスカルはこう訴えているように思います。

17　そして、何かを完成させるのではなく、未完成であるという状態が考え続けるための唯一の h ケイキになっているのだ、と。完成してしまえば、そこで考えが止まってしまいます。『パンセ』も、未完であるからこそ、ここまで広く読み継がれてきたのでしょう。

18　この世界のピースを集めて何かを作ることを止めてはいけない。「パンセ」＝「考え続けたこと」という未完の書が発するこのメッセージを、私たちは今こそ生かすべきではないでしょうか。

※福岡伸一『世界は常に更新されている』（第一学習社「高等学校国語総合」）

問九　1及び18段落で、筆者が「現代にこそ」「今こそ」と述べているのは、どのような現状があるからか、説明せよ。ただし、次の条件を踏まえて書くこと。なお、他の設問で使われた言葉などを用いてもよいものとする。

条件1：現在、誰の考え方に基づき、どんな考え(四字)が世の中で主流となっているのか。

条件2：それはどのような点(十～十五字程度)が欠けているのか。

条件3：実際の自然や人間、世界のどのようなあり方に対する対応を間違っているのか。

問九 ⑨ 現在、デカルトの考えに基づき、科学万能の考え方が主流となっているが、③点」それは自然や生命に対する謙虚さが欠ける考え方であり、③点」実際の自然、人間、世界が非常に複雑でダイナミック、かつ可変的な作用を繰り返しながら絶えず更新されているというあり方に対して間違った対応をし続けているという現状があるから。③点」 条件一つごとに③点 ※第1の条件：「因果関係」「機械論的」などの言葉を使ってうまく説明があれば「科学万能」でなくてもよい。

※授業での発展学習

次の文章を読んで、『世界は常に更新されている』に述べられた近・現代の科学と人間のあり方についての共通点を挙げよ。その際、キーワードとなる言葉は□で囲って述べること。

また、左の文章に続いて、筆者は「カオス理論」を挙げて近・現代の考え方を批判している。「カオス理論」について調べ、どのような批判をしていると考えられるか、述べよ。

※酒井敏『京大的アホがなぜ必要か　カオスな世界の生存戦略』集英社新書２０１９・３月刊

そもそも学術研究の目的は、世のため人のために「役に立つ」ことだけではありません。むしろ研究者の多くは、「この世界の真実を知りたい」という知的好奇心に突き動かされて仕事をしています。

「科学技術」という言葉でひとまとめにされるとそれが見えにくくなるのですが、本来「科学」と「技術」は別のもの。「技術」は、たしかに何かの役に立たなければ意味がありません。しかし「科学」の最大の目的は、自然界や人間社会を動かす原理や法則を見極めることでしょう。その科学的真実を探求する学問といえば、自然科学の分野では物理学がその最たるもの。ガリレオやニュートンの時代から、物理学者たちは自然界を支配する法則を探究してきました。物理学にもさまざまな応用分野はありますが、重力の本質に迫ったアインシュタインの相対性理論や、宇宙や物質の根源を探る素粒子物理学などは、その系譜に連なる基礎研究です。

そのような営みは、まだ哲学と科学が分かれていなかった古代ギリシャの時代から始まっていました。その時代の哲学者レウキッポス、デモクリトスらは、物質の根源が「原子」であるとする「原子論」（近代の元素の概念とは少し違いますが）を説き、また、やはりその時代の哲学者として有名なアリストテレスは、物体の運動についても体系的に論じました。いま物理学者が追究しているようなことを、大昔から人類は知りたかったわけです。

そんなことを知らなくても、とりあえず日々を生きていくことはできるでしょう。知ったところで、腹の足しにはなりません。でも、どうしても知りたい。いくら考えても答えはないかもしれないけれど、知りたい。どんな時代にも人間が持っているそういう知的な衝動が、科学のいちばん根底にある原動力です。

では、私たち人間はどうして自然界の奥底にある物質の根源や運動の法則などを知らずにいられないのか。人間に知的能力が備わってしまった以上、その使い途が最終的にそこに向かうのは必然だという気もします。子供の「なぜ？」「どうして？」というキリのない質問が、どんどん物事の深いところに向かっていくのと同じこと。人間が自然界のことを知りたくなるのは、「そこに自然界があるからだ」としか言いようがないのかもしれません。

太古の昔からほとんどの社会に「創世神話」が存在するのも、人間がまるで本能のように「なぜ？」「どうして？」と問い続けるからでしょう。この世界（宇宙）がどのように始まり、自分たち人間がどこから来たのかを、誰かが説明しないといけない。だから神話がつくられました。しかし、やはり神話の説明では納得がいきません。

そこで、人々の根源的な問いに対して納得のいく答えを見つけようとしているのが、科学者なのだと思います。いわば、神様になりたい。神様のようにこの世界を見渡し、それを支配する普遍的な法則、つまり「ルール」を探り当てたい。そう願うのが、科学者なのです。

原理的には完全な未来予測ができる？

自然界の探究によって解き明かされるのは、この世界の始まりや人間の起源といった「過去」だけではありません。もし自然界が普遍的な法則に支配されているのなら、その「未来」も予測できることになります。

たとえばニュートンの運動方程式（F=ma）も、まさにそういうものでした。惑星の動きであれ、大砲の着弾点であれ、物体の質量（m）や加速度（a）、そこに働く力（F）などの数値さえわかれば、それを方程式に当てはめるだけで将来の位置を予測できます。

このニュートン力学ができあがって以来、自然科学の世界では、初期条件とその時間発展（時間的な変化）を記述する法則があれば、未来に何が起きるかを予測できると信じられるようになりました。

その考え方をもっとも端的に表しているのは、一八世紀から一九世紀にかけて活躍したフランスの数学者、物理学者であり、かつ天文学者であるピエール＝シモン・ラプラス（一七四九～一八二七）の次のような主張でしょう。

〈ある知性が、与えられた時点において、自然を動かしているすべての力と自然を構成しているすべての存在物の各々の状況を知っているとし、さらにこれらの与えられた情報を分析する能力をもっているとしたならば（中略）この知性にとって不確かなものは何一つないであろうし、その目には未来も過去と同様に現存することであろう〉（『確率の哲学的試論』岩波文庫）

ここで仮定されたスーパーな知性の持ち主は「ラプラスの悪魔」と呼ばれます。いまの時代でいえば、完璧なコンピューターのようなイメージかもしれません。

この世に存在するすべての原子の位置と運動量を「ラプラスの悪魔」が知ることができれば、未来のことを完全に予測できる――つまり、原理的には完全な未来予測が可能だということです。この考え方は、二〇世紀に入ってからも自然科学の世界を支配していました。

もちろん現実的には、それを可能にするほど詳細に自然界の法則が解明されていたわけではありません。しかし物理学がさらに進歩すれば、いつかは自然界のすべてを記述する法則が見つかり、それによって何もかもが予測可能になると信じられていたのです。

これは、世間の人々が科学に期待するものとも一致するでしょう。未来のことが予測できれば、それに向けて効率よく準備を整えることができるので、社会にとって「役に立つ研究」になる。科学的な真実から、「役に立つ技術」を生み出せるわけです。

科学者自身は役に立てるためにやっていなくても、社会がそれを求めるのは当然のことでしょう。科学が進歩すれば、いつか地震の予知や完璧な天気予報が実現すると信じている人は大勢いるはずです。科学者の多くも、かつてはラプラスの言うとおり「不確かなものは何一つない」くなると考えていました。

因果律に基づく決定論的な世界観

「ラプラスの悪魔」に代表される世界観の根っこにあるのは、「因果律」にほかなりません。この世のあらゆる出来事には「原因」と「結果」があり、ある時間を隔ててその原因と結果が結びついている――そうみなすのが、因果律の考え方です。

因果律に従えば、現在の状態は過去に起きたことの「結果」であり、同時に未来に起こることの「原因」でもあります。だから、「現在」の状態を完全に理解すれば、「過去」の状態も「未来」の状態もわかると考えられました。このように、すべての出来事がそれ以前の出来事によって決まるという考え方のことを「決定論」といいます。

何やら難しい概念のように感じるかもしれませんが、これは一般的な常識でも呑み込みやすい話でしょう。何か起きれば「なぜこうなったのか」と原因を考え、将来のために「いま何をすべきか」を考えて計画を立てたりするのは、誰でも日常的にやっていることです。

もしこの世界で因果律が成り立たないとしたら、こんなに不安なことはありません。たとえば事故や病気などに原因がないのでは、今後もそれを防ぐことはできないでしょう。また、将来に向けた計画を立てることもできません。偶然によって生じている「現在」の状態をただ黙って引き受けるしかなくなってしまうのです。現在の努力が未来の成功につながらないのでは、頑張って勉強や練習をする気にもならないでしょう。

それでは困るので、原因と結果は必然的につながっていてほしいと思うのが人情です。そう思う以前に、ふつうは因果律が存在しない世界など想像さえしません。すべて物事には原因があると思うのが当たり前です。

もっとも、大昔の人類はちょっと違ったかもしれません。たとえば落雷や竜巻などの原因を考えてもわからないので、多くのことを「神様の仕業だ」と考えるしかなかったでしょう。そうだとすると、人間にはどうすることもできません。できるのは、せいぜい「悪いことが起きませんように」と神様に祈ることだけ。いつ神様がご機嫌を損ねるかはわからないのですから、それは原因不明の「偶然」に身を任せているのと同じことです。

しかし近代科学の発展によって、自然界で起きるさまざまな現象の原因が「神様」に頼らず論理的に説明できるようになりました。気象状態がどうなれば落雷や竜巻が発生するのかわかれば、あらかじめ予測して対策を講じることができます。

しかも科学が進歩するにつれて、原因を突き止める分析力や未来予測の精度はどんどん高まってきました。そのため現代人は、「未来は何でも予測できるのが当たり前」だと思っているように見えます。

もはや、事故や不祥事などを「偶然に起きたことだから仕方がない」とはなかなか思えません。自然災害であれ、人間がしでかすミスや悪事であれ、何か明確な原因があって起きた必然だと考える。だから何か起こるたびに「原因究明、再発防止」が叫ばれるのです。その背景には、「人間の理性によって世の中はコントロールできるはずだ」という信念のようなものもあるのではないでしょうか。

また、前章で触れた「選択と集中」の発想も、その根底には因果律に基づく決定論的な世界観があります。未来が予測できないのでは、「これから確実に売れるもの」や「短期間で成果の上がる研究」などを選んで集中的に投資することなどできません。現状を分析すれば次の動向がわかると信じているから、「約束された成功」に向かって選択と集中を行うのが合理的なやり方だと考えるのでしょう――。決定論的な未来予測が可能であることを前提にしている点で、これは科学的思考に基づく近代合理主義を象徴するような物の考え方だと思います。

平成29年度　第2回校内実力テスト　宮崎南高校2年　国語　H29・10・25(水)1・2限（110分）

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。　※標準時間25分

意志とは実に身近な概念である。日常でもよく用いられる。だが、それは同時に①謎めいた概念である。われわれはいまの段階では、この概念を満足のいく仕方で定義することはできない。ここではただ、「意志」という言葉のもとでイメージされているものを大まかに特定しておこう。

意志とは一般に、目的や計画を実現しようとする精神の働きを指す。意志は実現に向かっているのだから、何らかの力、あるいは原動力である。ただし、力ないし原動力とはいっても、制御されていない剝き出しの衝動のようなものではない。意志は目的や計画を持っているのであって、その意味で意志は意識と結びついている。意志は自分や周囲のさまざまな条件を意識しながら働きをなす。おそらく無意識のうちになされたことは意志をもってなされたとは見なされない。夢遊病者の歩行はその人物の意志による行為とは言われないだろう。

意志は自分や周囲を意識しつつ働きをなす力のことである。意志はそれまでに得られたさまざまな情報をもとに、それに促されたり、急き立てられたりと、さまざまな影響を受けながら働きをなす。

ところが不思議なことに、意志はさまざまなことを意識しているにもかかわらず、そうして意識された事柄からは独立しているとも考えられている。というのも、ある人物の意志による行為と見なされるのは、その人が自発的に、自由な選択のもとに、自らでなしたと言われる行為のことだからである。誰かが「これは私が自分の意志で行ったことだ」と主張したならば、この発言が意味しているのは、自分がその行為の出発点であったということ、すなわち、さまざまな情報を意識しつつも、そこからは独立して判断が下されたということである。

意志は物事を意識していなければならない。つまり、自分以外のものから影響を受けている。にもかかわらず、意志はそうして意識された物事からは独立していなければならない。すなわち自発的でなければならない。この矛盾をどう考えたらいいだろうか。

こうして軽く論じてみただけでも、意志の概念には何らかの困難が見出されることが分かる。意志は自分以外のものに接続されていると同時に、そこから切断されていなければならない。われわれはそのような実は曖昧な概念を、しばしば事態や行為の出発点に置き、その原動力と見なしている。

すると次のように考えたくなるかもしれない。

「私が何ごとかをなす」という文は②「能動」と形容される形式のもとにある。しかし、「私が何ごとかをなす」という仕方で指し示されている事態や行為であっても、細かく検討してみると、私がそれを自分で意志をもって遂行していると言いきれない。能動／受動の区別は実は不便で不正確なものなのである。にもかかわらず、われわれはこの区別に訴えかけざるをえない。なぜか？　もしかするとそれは意志の概念のせいではないだろうか？　能動は意志を強調する形式であり、受動はそれをひっくり返したものに過ぎない。そして、意志は実は曖昧さを抱えた概念であり、実際、最新の脳神経科学は行為の原動力としてのその役割を否定しつつある。

ならば、そのような曖昧なものの存在を信じているがゆえに、能動／受動という曖昧な区別を利用する羽目になっているとは言えないか？　能動／受動の区別の曖昧さとは、要するに意志の概念の曖昧さなのではないか？

すると、われわれは意志などという不確かな概念に依拠すべきではないし、意志など幻想であるから、そんな概念は投げ捨てねばならないと思われるかもしれない。③しかし、本当にそれで問題は解決するだろうか？

授業中に学生がうとうと居眠りをしていれば、教師はそのことを叱責する。だが、詳しく問いただしたところ、その学生がたとえば、「実は交通事故で両親を亡くして、幼い妹と弟のために毎晩アルバイトをしているんです。だからなかなか十分な睡眠がとれなくて、授業中なのに居眠りしてしまいました。すいません……」と事情を説明しはじめたらどうだろうか。教師はおそらく叱責したことを後悔するだろう。それどころか「そうか、身体に気をつけろよ」などと励ましの言葉すらかけるかもしれない。

授業中に居眠りをしていたという行為そのものは変わらない。なのになぜ、教師の対応は突如正反対のものになり、また、われわれもその変化に納得するのだろうか？

彼が叱責の対象から外されたのは、居眠りという行為について、彼には責任がないと見なされたからである。どうして責任がないと見なされたのかというと、その家庭の事情ゆえに彼には選択の余地がなかったと判断されたからだ。責任を負うためには、自分の意志で自由に選択ができなければならない。夜更かしをすることも、翌日の登校に向けて早く床に就くことも、どちらも自分の意志で自由に選択できたにもかかわらず、夜更かしをして次の日の授業で居眠りをしたとき、人はその居眠りの責任を負わなければならなくなり、叱責の対象となる。毎晩アルバイトをしていた彼は、自分の意志で自由に選択する状況になかったと見なされたがゆえに、叱責の対象から外されたのである。

これは言い換えれば、④責任を負うためには人は能動的でなければならないということである。受動的であるとき、あるいは受動的であらざるをえないときには、人は責任を負うものとは見なされない。

この例は、能動や意志といった概念が実に都合よく使われるものであることを示している。なぜならば、ある状況下では幼い妹と弟のために毎晩アルバイトをするこの学生は、しっかりとした意志を有する人物であるとか、自分で考えて能動的に行動する人物であると評価されることが十分に考えられるからである。それに対し、たとえば、早く寝ることもできたのに(テレビゲームなどをして)ずるずると夜更かしした学生は、しばしば、［　X　］と評されよう。にもかかわらず、その同じ彼が、授業中の居眠りのために叱責される段になると、突如として、［　Y　］に転ずるのだ。

ここからわかるのは、人は能動的であったから責任を負わされるというよりも、責任あるものと見なしてよいと判断されたときに、能動的であったと解釈されるということである。意志を有していたから責任を負わされるのではない。責任を負わせてよいと判断された瞬間に、意志の概念が突如出現する。「夜更かしのせいで授業中に居眠りしているのだから、居眠りの責任を負わせてもよい」と判断された瞬間に、その人物は、夜更かしを自らの意志で能動的に選択したことにされる。つまり、責任の概念は、自らの根拠として行為者の意志や能動性を引き合いに出すけれども、実はそれらとは何か別の判断に依拠しているということである。

授業中に居眠りしてしまったことの責任などはたいした問題ではない。ならば、意志や能動性の有無が同じく曖昧であるが、問題としては深刻である事例、⑤例えばアルコール依存症の場合ならどうであろうか？

（國分功一郎『中動態の世界　意志と責任の考古学』より　医学書院　二〇一七・三月刊）

問一　傍線部①について、筆者がここで意志を「謎めいた概念である」と述べているのはなぜか、五〇字以上六〇字以内で説明せよ。

問二　傍線部②「『能動』と形容される形式」について、筆者は単純ではないと考えている。次の二つの文を比較して、どのような違いがあるか、筆者の考えに沿って説明せよ。答え方は「Aの文は～であるのに対し、Bの文は～である。」とすること。

A：私は友人を励ました。

B：私は物思いに耽っていた。

問三　傍線部③「しかし、本当にそれで問題は解決するのだろうか？」とあるが、筆者はなぜこのように述べているのか、次の中から正しいものを一つ選んで記号で答えよ。

ア　人間の意志は場面場面で変化しやすく、安定したものとは言えないから。
イ　意志の概念を投げ捨てること自体が、現実的にはあり得ないことだから。
ウ　事態や人間の行為の出発点にある意志を否定すること事態が誤りだから。
エ　意志については事態や行為の後で、都合よく特定される要素が強いから。
オ　意志の概念に変わる、ふさわしい概念を想定することは困難であるから。

問四　□X・Yに入れるのに適当な表現を、それぞれ次の選択肢の中から選んで、記号で答えよ。

ア　自由に選択できる意志をもった能動的な人物　　イ　自由な選択肢の中から適切な行動を選んだ能動的な人物
ウ　責任を回避する意志を働かせた能動的な人物　　エ　指示に従うだけの、受動的な人物
オ　意志が弱い、受動的な人物　　カ　意図的に受動性を選択している人物

問五　傍線部④「責任を負うためには人は能動的でなければならないということである」とあるが、一般にそう見なされていることに対して、筆者はどのように考えているか、文中の言葉を使って三〇字以上四〇字以内で答えよ。

問六　傍線部⑤「例えばアルコール依存症の場合ならどうであろうか？」とあるが、これまでの論に従えばどのような判断に至ることになるか、三〇字以上四〇字以内で結論となる一文を作れ。

問一

問二

問三

問四

X

Y

問五

問六

⑥　問一　意志は自分以外のものから影響を受けた意識であるとか一方、意識された事柄から独立したものだとか。

⑥　問二　Aの文は意志をもった能動的行為であることが明確であるのに対し、Bの文は自分で意志をもって行動しているとは言い切れない文である。

※ここは能動態と言われる態が単純なものではないことを述べた箇所（後に「能動／受動」に言及している）。内容や主語の違いを説明したものは不可。

(11)　問三　エ⑤　問四　X　オ③　Y　ア③

問一～問三は問い方からも「態」の問題とわかる。別解「能動―受動」の言い換えが明確にできるAに対し、Bはできにくい。

⑥　問五　責任の概念は行為者の意志や能動性を根拠として考えることはできないものである。

⑥　問六　本人の意志ではどうにもできない病気に責任の概念を持ち込むことは困難である。

※二点が挙げられ、矛盾として書かれていること。一点だけ上げただけでは矛盾の指摘にならない。

テーマ考察の一過程としての「羅生門裁判」

キーワード　「善」「悪」
「罪」(①自己の存在に対する罪)と(②社会の中で他者に対する罪)
※「罪」には sin と crime があり、crime は②に相当する。sin は存在そのものが持つ罪。宗教的で複雑なのでここでは深く入らない。

それぞれの立場として、根拠のある意見を述べよ。前後の文脈も考慮すること。

① 裁判官(長)、老婆(被告)、弁護人＝芥川、**検察官＝自分**

老婆：せねば飢え死にするから仕方なくしたことだから、「悪」かもしれないが「罪」に問われるものではない。

芥川：生きて存在するものが安易に生を放棄することこそ「悪」である。老婆の行為は遺体を傷つけるとはいえ、既に腐敗した遺体であるし、生きている誰かに損害をもたらすものでもない。生き抜くための老婆の行為は罪に問われるものではない。

検察官：［根拠・意見(2〜3行程度)］

② 裁判官(長)、老婆(被告)、**弁護人＝自分**、検察官＝芥川

老婆：せねば飢え死にするから仕方なくしたことだから、「悪」かもしれないが「罪」に問われるものではない。

弁護人：［根拠・意見(2〜3行程度)　※①の芥川とは違う弁護をすること］

検察官：しかし、老婆がかつらで収入を得るというからには、飢え死にが今日明日に迫っているほどの極限状況であったとは言えず、「悪」ではあるが「罪」ではないというのは、自分勝手な正当化であると言うべきである。弁護人が情状酌量を求めるのも、認められるべきものではない。

③ 裁判官(長)、下人(被告)、弁護人＝芥川、**検察官＝自分**

下人：自分は職を失い、この荒廃した社会の中では新たな職にありつける見込みもなかった。老婆の言葉は、この荒廃した社会の中では許されることである。奪った服の弁償はするが、それ以上の「罪」に問われるべきことではない。

芥川：今の言葉どおり、今回の件は劣悪な社会環境こそが問題である。生きる術を失った人が何とか生き延びようとしてした行為を絶対的な「悪」だとして「罪」に問うていたら、「飢え死にする善人」ばかりが増えていく。そうなってはいけないことをアピールするためにも、今回の件は無罪としてはどうか。

検察官：［根拠・意見(2〜3行程度)］

④ 裁判官(長)、下人(被告)、**弁護人＝自分**、検察官＝芥川

下人：自分は職を失い、この荒廃した社会の中では新たな職にありつける見込みもなかった。老婆の言葉は、この荒廃した社会の中では許されることである。奪った服の弁償はするが、それ以上の「罪」に問われるべきことではない。

弁護人：［根拠・意見(2〜3行程度)　※③の芥川とは違う弁護をすること］

検察官：下人の困窮は認めたとしても、弁護人が言うように、正常な判断力を失っていたとは言えないし、社会の罪として個人の行為が何でも許されるようになれば、犯罪社会になってしまう。下人の行為は悪で、厳しく罪に問われるべきである。

◎「羅生門」は文学作品であり、「善／悪」「有罪／無罪」のどちらかに軍配を上げて決着をつけるものではない。あくまでも自分なりのテーマ考察の一過程として右の四つを思考実験として行ってみて、改めてこの作品に入り込んでみよう。